

第4節 西アジアとの対立

世界最古の文明は西アジア（メソポタミア）で発祥し、エーゲ海域に伝わった。キリスト教も、1世紀、この地域で成立しており、古くからヨーロッパは隣接するアジアの影響を強く受けてきた。とりわけ、アラビア半島やその周辺地域にまたがる「**西アジア**」は西洋の発展に大きく貢献している。欧州はこの地域と対峙しながら独自のアイデンティティを確立し、地域としての一体性を育んできた（2頁参照）。そのため、ヨーロッパについて学ぶ上で西アジアの存在は無視できない。以下では、両地域の関係、特に、対立について説明する。なお、長い西洋の歴史で最初に発生した戦争は西アジアの帝国ペルシアとの戦いであった。ギリシア神話で語られているトロイア戦争はそれよりも500年以上早く勃発しているが、実証されているわけではない（注1012参照）。

※ 西アジア、近東、中東、中近東

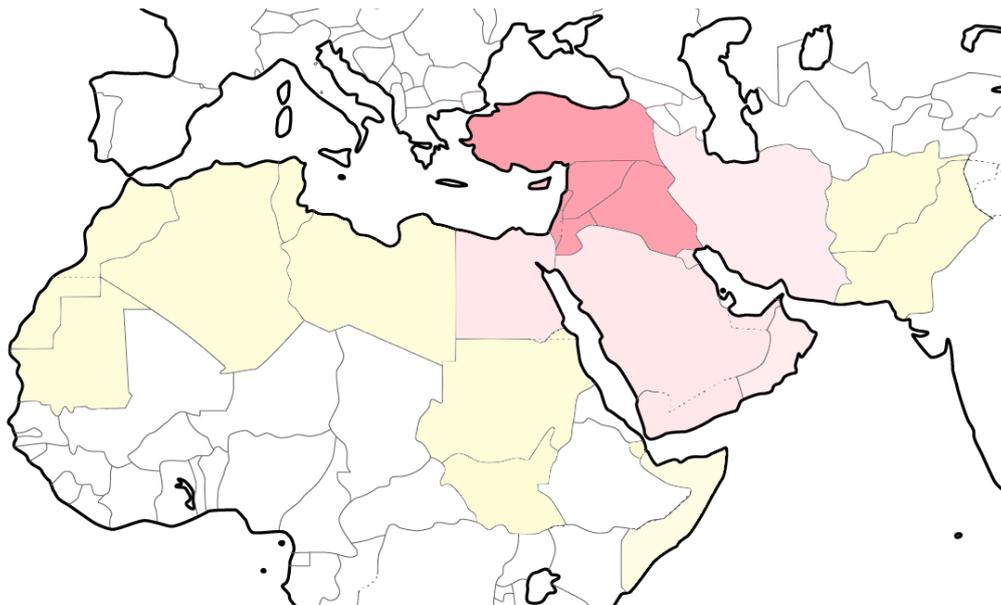
「**西アジア**」とは文字通り、アジアの西部であり、アラビア半島やその周辺の地域を指す。1869年におけるスエズ運河の完成以降、アフリカとは、この人口の水路によって隔たれており、それより西に位置するエジプトの領土は西アジアには含まれない。また、国連の分類によると、イランもこの地域に属さない。

19世紀中頃、オスマン帝国のヨーロッパ領を除いた領土は「**近東**」(Near East)と呼ばれるようになった（17世紀中頃の帝国最盛期の版図について、424頁参照）。この基準によると、下の地図で赤く塗られた国々が近東に属し¹²⁴⁷、イラク、エジプト、サウジアラビア等は含まれない。これらの3国やその他のアラブ世界は「**中東**」(Middle East)に位置するが、現在、米国のナショナル・ジオグラフィック協会は近東と中東を区別していない。なお、両者を合わせて「**中近東**」(Near and Middle East)と呼ぶことがある。本書では一般的な分類に即し、中東、近東、中近東を区別せず、それらを同じ地域を指す単語として使用しているが、近東という概念は、特段の事情が無い限り、用いていない。

我が国の外務省も近東という概念を使用せず、以下の国々を中東に分類しているが、西洋で主流の見方とは異なり、エジプトを中東（中近東）に含めていない。また、トルコを中東に分類する点でも異なっている。

アフガニスタン、アラブ首長国連邦、イエメン、イスラエル、イラク、イラン、オマーン、カタール、クウェート、サウジアラビア、シリア、トルコ、バーレーン、ヨルダン、レバノン

なお、近年、G8は、より広い範囲を「**大中东**」(Greater Middle East)と呼んでいる。



【赤色】近東 ※ 現在は近東と中東を区別せず、同一の地域として捉えることが多い。

【桃色】中東

【赤色、桃色、黄色】大中东

¹²⁴⁷ この分類によると、トルコやキプロスは近東に属し、ヨーロッパには含まれない。

1. 古代ギリシアとペルシア ～ イスラム教成立以前の対立 ～

世界最古の文明は紀元前 4000 年～前 3000 年、メソポタミアやエジプトで発祥した。前 2500 年頃になると、この**オリент文明**の影響を受けながら、エーゲ海域でヨーロッパ最古の文明・文化が誕生する (309 頁参照)。それを築いた古代ギリシア人は、前 1100 年頃、エーゲ海を渡り、小アジア (アナトリア) に進出したと考えられている¹²⁴⁸。前 750 年頃になると、西岸のイオニアに植民市が建設され、オリент地方との交易で栄えた。中でも、ミレトスやエフェソスでは自然哲学が発展し、ギリシア哲学の先駆地域となるが、前 6 世紀後半、東方より進出してきたペルシア帝国 (**アケメネス朝**)¹²⁴⁹ に支配された。前 500 年、ギリシア人が蜂起すると、ヨーロッパ文明の存続を脅かす**ペルシア戦争**に発展した。戦いは 4 次に亘って繰り返され、約 50 年間 (紀元前 500～前 449 年)、続いた。ギリシアの都市国家 (ポリス) はこの戦争で勝利を収め、自由と民主主義を守ることができたと説明されることもあるが¹²⁵⁰、厳密には、この戦争に勝利した後で、民主主義や文化は発展する (129 頁参照)。



なお、当時、イスラム教はまだ成立しておらず、アケメネス朝はイスラムの王朝ではない。

◎ ペルシア戦争の推移

前 500 年、イオニアの反乱を制したペルシア皇帝の**ダレイオス 1 世**は、前 492 年、この地域を支援したアテネに報復を加えるため、海軍を派遣した。しかし、軍隊はギリシア本土に上陸する前に、エーゲ海北部のアトス岬付近で暴風にあい壊滅する (第 1 次戦争)。

前 490 年、ダレイオス 1 世が攻撃を再開し、戦争は本格化した (第 2 次戦争)。ペルシア海軍はアテネ北方約 42km のマラトンに上陸し、2 倍強の兵力で襲いかかったが、アテネは重装歩兵を密集させて抗戦し、大軍を撃退した¹²⁵¹。ヨーロッパ史上、最初の戦争で勝利を挙げたギリシアは士気を高め、ペルシアへの反発を強めていくことになる。

ダレイオス 1 世の跡を継いだクセルクセス 1 世は、前 480 年、自ら軍隊を率い、出陣した (第 3 次戦争)。彼がダーダネルス海峡を渡り、北方から陸路で攻撃をしかけると、兵力で劣るギリシアの都市国家は団結し、果敢に立ち向かった (ただし、ペルシア側についたポリスもあった)。とりわけ、ペルシア軍の侵入をくい止めるため、スパルタの**レオニダス王**が 300 人の兵を率い、20 万の大軍と対戦したことが知られている (前 480 年 8 月のテルモピュライの戦い)。スパルタ軍を倒したペルシア軍はアテネに

¹²⁴⁸ Karl-Wilhelm Welwei, Die griechische Frühzeit, C. H. Beck 2019, 3rd edition, pp. 38-41.

¹²⁴⁹ 前 550 年、イラン人が興したアケメネス朝ペルシアはインダス川流域からマケドニアまでの広い地域を支配し、世界帝国を築いたが、前 330 年、アレクサンダー大王に滅ぼされた。前 538 年、初代国王 (皇帝) のキュロス 2 世は新バビロニア王国を滅ぼし、その首都バビロンに連行されていたヘブライ人 (ユダヤ人) の帰郷を許した。バビロン捕囚について、282 頁を参照されたい。

¹²⁵⁰ 南川高志「第 1 部 古代 総説」服部良久・他編『大学で学ぶ西洋史 古代・中世』(ミネルヴァ書房 2006 年 8 月) 2～11 頁 (9 頁)。

¹²⁵¹ マラトンの戦いでの勝利をアテネに伝えるため、フィリッピデスと呼ばれる青年が約 40km の道のりを走り、吉報を届けた後、落命したという。陸上競技のマラソンは、この故事に基づき行われるようになったという説があるが、実証されていない。

侵入し、アクロポリス（314 頁参照）を破壊したが、アテネの指導者テミストクレスは降伏せず、諸都市の三段櫂船をサラミス島に集結させ、総力戦に出た。同年 9 月、この海戦でギリシアが勝利を収めると、ペルシアの海軍は帰郷し、陸軍は北方に退却した。

前 479 年、ペルシア軍は南下し、攻撃を再開するが、アテネ・スパルタの連合軍によって撃退された。ペルシア軍は海戦でも敗れ、イオニアはペルシアの支配から脱した（第 4 次戦争）。

その後も小規模な戦闘が続いたが、前 449 年、アテネはペルシアと和約を交わし、戦争を終わらせた。

東洋人の脅威から解放されたポリスは全盛期を迎え、アテネでは民主主義や学門・芸術が発展したが（129、312 頁参照）、繁栄は長続きせず、スパルタと覇権争いを繰り返す内に衰弱していった。前 338 年、ギリシアの都市国家は北方からマケドニア王国に攻め入れられ、その支配下に置かれた（315 頁参照）。前 330 年、この王国のアレクサンドロス大王は東征してペルシア帝国を滅ぼすと、さらに東方へと兵を進め、インダス川流域まで勢力を拡大したが、前 323 年、大王が 32 歳の若さで急死すると後継者争いが勃発し、広大な所領は分裂した。

小アジア南部からインダス川流域にまたがる広い地域はシリア王国（セレウコス朝）の領土となる。現在のシリア（正式名称はシリア・アラブ共和国）とは異なり、この王国はアレクサンドロス大王の武将のセレウコスが建てたギリシア系の国であり、アジア西部にギリシア文化を浸透させた。この文化がオリエント文化と融合すると、ヘレニズム文化が生まれるが（316 参照）、主体となったのはギリシア文化であり、セレウコス朝シリアでは、ミロのヴィーナス、ラオコーン、サモトラケのニケ（右の画像）等、ギリシア彫刻を象徴する作品が制作された。



セレウコス朝はギリシア語を公用語とした（190 頁参照）。領土内に住んでいたユダヤ人もこの言語を母語としたため、後世（1～2 世紀）、『新約聖書』はギリシア語で編纂されることになる。

前 250 年頃、東方でバクトリア王国が独立し、パルティア王国とペルガモン王国が後に続いたため、シリアは領土の大半を失った。前 142 年にはパレスチナのユダヤ人も独立を果たした。

シリア王国は地中海東岸のアンティオキア（現トルコ・アンタキヤ¹²⁵²）を首都とした。前 2 世紀の終わり頃、中国との交易ルートである「シルクロード」が開発されると、この都市は西方の起点になる（430 頁参照）。



前 64 年、シリアは古代ローマに滅ぼされ、その領土にはローマの属州シリアが建設された。シリアから独立していたパレスチナも、翌年（前 63 年）、ローマに攻略され、西暦 6 年、ユダヤ属州になる。

なお、アレクサンドロス大王の祖国マケドニアとギリシアの都市国家は、すでに前 2 世紀中頃、ローマに攻略されており、前 148 年、その属州となった。前 133 年、ローマはペルガモン王国も攻略している。

小アジアやメソポタミア地方を制したローマはパルティア王国とも度々、対戦しており、この戦争で国力を消耗したパルティアは農耕イラン人に滅ぼされた。226 年、彼らはペルシア（ササン朝）を興し、ローマの新しい敵になる。両者間

¹²⁵² 1939 年、シリア領からトルコ領に変わった。

の戦闘はペルシアがイスラム勢力（**正統カリフ時代**）に滅ぼされる7世紀半ばまで続き¹²⁵³、その後は、この異教徒が東ローマ帝国と対立した。なお、イスラム王朝は正統カリフ時代（632～661年）、ウマイヤ朝（661～750年）、アッバース朝（750～1258年、415頁参照）へと変わっていく。

2. イスラム教の成立と聖戦（ジハード）による領土拡大（6世紀～15世紀）

東ローマ帝国とペルシア（ササン朝）の戦闘を理由にシルクロードやペルシア湾沿いの貿易航路が衰退すると、紅海東岸にあるメッカが新たな貿易の拠点になり、中東シリアとの交易を発展させた。570年頃、この都市の大商人の家に生まれたムハンマドは、40歳になった頃、**イスラム教**を創始するが（116頁参照）、伝統的な部族信仰を重んじる人々より迫害されたため、622年、約300km北方のメディナに逃れた（聖遷、ヘジラ）。しかし、数年後に聖戦（ジハード）を開始すると、630年、メッカの制圧に成功した。これを機にアラビア半島における諸部族がムハンマドに服従し、半島の統一が達成された。

632年、ムハンマドが亡くなると、カリフと呼ばれる後継者の下で政教一致¹²⁵⁴を基盤とするイスラム国家（アラブ帝国）が成立した。661年にウマイヤ朝が成立するまで続いた約30年を「**正統カリフ時代**」と呼び、主に、メディナに拠点が置かれた。

第2代カリフのウマルは東ローマ帝国（ビザンツ帝国）やペルシアに対して聖戦を展開し、次々と領土を拡大していった。636年、東ローマ帝国領のシリアを攻略すると、翌年、エルサレムも占領した。なお、当時、聖地に古代ローマ時代の建物は残っておらず、荒廃が進んでいた。ウマルは土中に巨大な岩を見つけると、ムハンマドが天に昇った起点とみなし¹²⁵⁵、この岩がある丘の上に「ウマルのモスク」を建てた。また、この辺りを聖域に指定したが、キリスト教の聖墳墓教会の存続も認め、信仰の自由を保障した。なお、後述するウマイヤ朝の時代（692年）、カリフのアブド＝アルマリクの命により聖石を祀る記念堂、つまり、「**岩のドーム**」が建立されている（282頁参照）。



岩のドーム（エルサレム）¹²⁵⁶

◎ ミット

イスラム勢力の支配下でイスラム教に改宗しなかったキリスト教徒やユダヤ教徒等はズィンミー（Dhimmī ジンミー）と呼ばれ、ジズヤ（人税）とハラージュ（地税）を払うことで生命・財産や信仰の自由を保障された。ただし、①公職に就けない、②イスラム教徒と結婚できない、③イスラム教徒に対して布教活動をしない、また、④地域によっては信仰が分かる衣服を身につけるといった条件が課された。支配者であるイスラム教徒と非イスラム教徒であるズィンミーはこれらのことを定めた契約を交わしており、この制度をミット（millet）と呼ぶ。

イスラム教とキリスト教は何れもユダヤ教を基盤にしており、これらの宗教はアブラハムの宗教（116頁参照）と呼ばれる。また、信徒は「**啓典の民**」と呼ばれ、納税と一定の義務を条件に信仰の自由が保障されることになった。その歴史は第2代カリフのウマルの時代にまで遡り、8世紀初旬にイベリア半島を占領したイスラム王朝や、15世紀半ば、東ローマを倒したオスマン帝国にも引き継がれた。

¹²⁵³ 260年、ローマ皇帝のウォレリアヌスはペルシアとの戦いに敗れ、捕虜になるという事件も発生した（322頁参照）。

¹²⁵⁴ この政教一致は宗教上の指導者が政治も司り、『コーラン』に基づき国を収めることを指し、国と教会が一体となるキリスト教圏の政教一致（116頁参照）とは異なる。

¹²⁵⁵ 『コーラン』によると、西暦619年のある夜、ムハンマドは大天使ガブリエルと共にメッカからエルサレムまで天馬にまたがって旅をし、巨大な岩から天に昇ると、全ての預言者に会い、彼らと共に礼拝を行ったとされている（116頁参照）。

¹²⁵⁶ 画像出典 https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/8/8b/Jerusalem-2013%282%29-Temple_Mount-Dome_of_the_Rock_%28SE_exposure%29.jpg（画像の周りは著者により切り抜いてある）。

661年、第4代カリフのアリーが亡くなると、後継者争いが起きるが、ウマイヤ家のムアーウィヤがそれを制し、新しい王朝（ウマイヤ朝）を開いた。このイスラム勢力は北アフリカにおける東ローマ帝国領（現在のチュニジア、アルジェリア、モロッコ等）を攻略すると、そこからイベリア半島に渡り、711年、キリスト教徒が建てた**西ゴート王国**を滅ぼした。以後、半島ではキリスト教徒とイスラム教徒の戦いがおおよそ770年間、続くことになる（スペインの状況について、484頁を参照されたい）。なお、北アフリカから北上してきたこの異教徒は**ムーア人**と呼ばれた。

彼らは半島の大部分を制すと、ピレネー山脈を越え、**フランク王国**に侵入するが、732年、**トゥール・ポワティエ間の戦い**で敗れ、退却した（329頁参照）。現フランス中央部で行われたこの戦いでフランク王国を支援するため、イタリア半島に建てられていたランゴバルド王国が援軍に駆けつけている¹²⁵⁷。

◎ シーア派とスンナ派

ウマイヤ朝はカリフの世襲制を採用した最初のイスラム国家であるが、ウマイヤ家カリフの正統性を認めない**シーア派**が出現し、それを認める**スンナ派**と対立した。第4代正統カリフであったアリーの子孫のみがカリフになれるとするシーア派はイスラム教徒の中では少数派である。

ウマイヤ朝は成立から僅か数年後の674年、東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルを包囲しているが、陥落させることはできなかった。その後、674～678年、また、717～718年にも帝都を包囲するが、攻略は何れも失敗に終わっている。なお、7世紀後半、東ローマは水で消すことができない「ギリシアの火薬」を開発し、包囲線を優位に進めた（右図参照）。



『スキュリツェス年代記』の挿絵

『スキュリツェス年代記』とは11世紀後半、東ローマ帝国の歴史家ヨハネス・スキュリツェスが編纂した歴史書である。

ウマイヤ朝は、さらに740年、帝国領の小アジアに侵入したが、内紛が発生したため、撤退を余儀なくされた。

東ローマ帝国の攻略に相次いで失敗したウマイヤ朝は、750年、他のイスラム勢力（アッバース家）に倒されたが、カリフの子孫はイベリア半島に渡り、756年、半島で**後ウマイヤ朝**を開いた（484頁参照）。

他方、西アジアには**アッバース朝**が成立する。このイスラム勢力は、827年、東ローマ帝国からクレタ島やエーゲ海上の島々を奪い、961年まで支配した。さらに、シチリア島を手に入れたが、10世紀半ばには他のイスラム勢力（ブワイフ朝、後に、セルジューク朝）に実権を握られて衰退し、13世紀半ば、モンゴル帝国（421頁参照）に滅ぼされた。なお、この中央アジアの遊牧国家はロシアの起源となるキエフ公国も倒している。その後、モンゴルの支配は240年間、

続き、モスクワ大公国が独立を達成したのは1480年である（516頁参照）。



8世紀中頃の世界

¹²⁵⁷ Wolfgang Altgeld, Kleine italienische Geschichte, Reclam-Verlag, pp. 3-4.

◎ アッバース朝 ～ 最初のイスラム帝国 ～

ムハンマドの叔父のアル＝アッバースを祖とするアッバース家は、750年、ウマイヤ家を倒し、新しいイスラム王朝を建てた。ウマイヤ朝は中東のダマスカスに首都を置いていたが、アッバース朝は、762年、メソポタミア平原にバグダードを建設し、新都とする。北アフリカからインダス川西岸に至る広い地域を支配し、非アラブ人（イラン人）も高級官吏として登用した。また、アラブ地域と非アラブ地域の平等化・統合を図ったことから、最初のイスラム帝国とみなされている。

アッバース朝はシチリア島やクレタ島にも勢力を伸ばしたが、10世紀半ば頃より他のイスラム勢力に実権を奪われ、衰退すると、13世紀半ば、モンゴル帝国に滅ぼされた。なお、カリフ（ムハンマドの後継者である宗教的指導者）の一族はカイロに逃れ、この地を支配していた他のイスラム王朝（マムルーク朝）の保護を受け、傀儡王朝を建てている。カリフの称号も継続して使用されたが、イスラム世界における指導力は失われ、カリフ制度は実質的に消滅した。1517年、マムルーク朝を滅ぼしたオスマン帝国のスルタン（政治的指導者である皇帝）がカリフの位を承継し、「スルタン＝カリフ制度」を開始しているが、カリフは名目的な称号に過ぎなかった。

紀元前4世紀末頃（ヘレニズム期）、プトレマイオス朝エジプトを起こしたプトレマイオス1世¹²⁵⁸は首都アレクサンドリアに「ムセイオン」と呼ばれる研究所を建設した。その付属図書館に収められていた大量のギリシア語やラテン語の文献は、8世紀後半、アッバース朝のカリフ（ハールーン＝アッラシード）によってバグダードに移され、「知恵の宝庫」の蔵書になる。次世紀の前半（830年頃）、この施設の名称は「**知恵の館**」（バイト＝アルヒクマ Bayt al-Hikmah）に改められ、アラビア語への翻訳作業が行われた。こうして古代ギリシアの著作は生き延びることができた。8世紀以降、イベリア半島に渡ったアラビア人はそこでも図書館を建て、ギリシア語やラテン語による大量の資料を訳した。ルネサンス期、イタリア半島で古典の再生が可能であったのは、これらの翻訳が残っていたためである。



「知恵の館」¹²⁵⁹

830年頃、バグダードに建てられた「知恵の館」（バイト＝アルヒクマ）には天文台も設置されていたと言われる。数世紀に亘り翻訳作業が行われたが、1258年、モンゴル帝国との戦いの際に焼失した。

なお、『千夜一夜物語』は、イスラム世界で古くから語り継がれてきた伝承をまとめたもので、8世紀頃、アッバース朝の時代に編纂された。次世紀、その原型が完成しているが、ヨーロッパでも読まれるようになったのは18世紀に入ってからである。1704年、フランスで『千夜一夜物語』（Les Mille et Une Nuits 『千一夜』）として出版されると、人気を博し、他の国でも翻訳され、読まれるようになった。

¹²⁵⁸ プトレマイオス1世（前367～前282年）アレクサンドロス大王の旧友であり、かつ、側近の一人であった。また、大王の伝記を執筆している。

¹²⁵⁹ 画像出典 <https://mvslim.com/bayt-al-hikma-proves-us-that-islam-and-science-arent-and-were-never-contradictions/>

3. イベリア半島における国土回復運動 (8世紀～15世紀)

紀元前133年、古代ローマはイベリア半島に属州ヒスパニアを建設し、この地域をローマ化した。また、3世紀頃までには半島全域にキリスト教が広まる(483頁参照)。395年、ローマ帝国が東西に分割されると、半島は西ローマ帝国の領土になるが、西ローマは発足当初より弱体で、418年、半島の北部には西ゴート王国が建てられた。6世紀後半、このゲルマン国家は半島全域を支配するようになったが、711年、アフリカ北部から侵入してきたイスラム教徒(ウマイヤ朝)に滅ぼされた。国土を失ったキリスト教徒は北方に逃れ、アストゥリアス王国を建てると、この国を拠点とし、領土奪回を目指して戦うようになる。これを**国土回復運動(レコンキスタ)**と呼び、その達成には770年という非常に長い期間を要した(実質的には、520年である点について、485頁参照)。なお、その間、イスラム王朝は度々、変わっている。先住のキリスト教徒も分離・独立を繰り返したが、11世紀後半、半島北部に建てられていた**カスティリヤ王国**が勢力を増し、レコンキスタを牽引するようになる。1143年、**ポルトガル**はこの王国から独立した。また、この王国が**アラゴン王国**と統合し、**スペイン王国**が成立するのは、それから約340年が経過した1479年である(484頁参照)。

◎ アンダルス

イスラム勢力が支配していた当時、イベリア半島は彼らの言語(アラビア語)で「アンダルス」¹²⁶⁰と呼ばれ、アラビア文化がもたらされた。特に半島南部でイスラム様式の建物や庭園が多数、造られた。それには研究施設や図書館も含まれ、学門(哲学、数学、天文学等)が発展する。また、ギリシア語やラテン語の資料がアラビア語に翻訳され、ヨーロッパの古典の保存に大きく貢献した。彼らによって先進の農業技術がもたらされると、生産性が大きく向上する。灌漑事業により農地も拡大した。なお、イスラム教徒は聖戦を目的として半島に進出して来たわけではないため、先住のキリスト教徒が改宗を強制されることはなかった(413頁参照)。むしろ、それまで弾圧を受けてきたユダヤ人にとってイスラム教徒は「解放者」であり、この異教徒と共に社会・経済を動かした。もっとも、職業や租税に関し、非イスラム教徒は不利な扱いを受けるだけでなく、異教徒と分かる身なりを強要された。また、同じイスラム勢力であっても、王朝・支配者が変われば、文化的な統制を受けることがあった。そのため、キリスト教徒も大半は改宗した¹²⁶¹。

イスラム教徒との戦いはキリスト教徒の団結を強めることになった。11世紀末、カスティリヤ王がヨーロッパ諸国に支援を要請すると、フランス・ブルゴーニュ家(535頁参照)のアンリはイベリア半島に渡り、ポルトガルの国土回復に貢献すると、領地と爵位を与えられた。彼はアルフォンソ6世の娘を妻にし、二人の間に生まれた男子がポルトガル王国を興した(451頁の注1422頁参照)。

13世紀初旬には、教皇のインノケンティウス3世(153頁参照)の呼びかけに応じ、イベリア半島でもキリスト教徒の連合軍が編成され、フランスや神聖ローマ帝国から数万の騎士や兵士がピレネー山脈を越えて集まってきた。

また、それまで半島のキリスト教国(カスティリヤ王国とアラゴン王国)は対立していたが、教会の首長の命に従って和解すると、1479年にはスペイン王国を成立させた(485頁参照)。勢いに乗ったキリスト教徒は、1492年、イベリア半島南端に残されていた最後のイスラム王朝(**グラナダ王国**)を滅ぼし、国土回復を達成する。その際、敬虔なキリスト教徒であるスペイン国王はムーア人に信仰の自由を保障したが、後にそれを改め、キリスト教徒になるか、それとも、スペインから退去するか、どちらかの選択を強いた。イスラム教徒の多くは見かけ上の改宗をして、スペインに残り、**モリスコ**(morisco「小さなムーア人」という意)と呼ばれたが、隠れてイスラム教を信仰していることが明らかになると迫害を



13~15世紀のイベリア半島

¹²⁶⁰ 現在、半島の最南部にはスペインの「アンダルシア州」が設置されているが(484頁の注1386参照)、「アンダルス」とは異なる。

¹²⁶¹ Til Biermann, Als Muslime und Juden eine Symbiose eingingen, in <https://www.welt.de/article115521400/>

受けた。しかし、「隠れイスラム教徒」はその後も存在し続けたため、1609年、スペイン国王のフェリペ3世は追放令を出し、弾圧を強化した。なお、半島に住むイスラム教徒はすでに少なくなっていたため、人口の約3割を失ったバレンシアを除けば、追放令は大きな影響を及ぼさなかった。ムーア人の中には同化してスペインに残る者もあり、現在、スペイン国民の約1割はアフリカにルーツを持つとされているが、カスティリヤ北西部では2割を超える¹²⁶²。

4. 十字軍遠征 (11世紀末～13世紀)

11世紀末から13世紀にかけて、キリスト教徒はイベリア半島だけではなく、小アジアや中東でもイスラム教徒と戦火を交えた。つまり、中世の騎士達は中東への遠征を繰り返しており、これは聖地奪還を目指す聖戦であった。

言い伝えによると、西暦30年頃、イエスはエルサレム（イエルサレム）で十字架に磔にされて死亡し、この地で埋葬された後、この地で復活を果たした（232頁参照）。そのため、エルサレムはキリスト教の聖地とされている。619年、ムハンマドもこの地にある巨大な岩から天に昇ったとされており（413頁参照）、イスラム教徒にとっても、エルサレムは、メッカ、メディナに次ぐ第3の聖地にあたる。それと同時に、ユダヤ教の聖地でもあり、すでに紀元前10世紀、この地に神殿が建てられている（281頁参照）。なお、三つの宗教にこのような共通点があるのは、キリスト教とイスラム教はユダヤ教を基盤にしているためである。

キリスト教が創始された1世紀中頃、エルサレムはローマ帝国に属していた。4世紀末に帝国が分割されると、東ローマ帝国領となる。東ローマは、すでに7世紀前半、聖地をイスラム教徒に奪われていたが（413頁参照）、11世紀後半、他のイスラム勢力が小アジアに進出し、帝都コンスタンティノープルに迫ると、東ローマ皇帝はエルサレムがイスラム教徒に占領されていることを指摘しながら、教皇に援軍を要請した。教皇がそれに応じ、西欧のキリスト教徒に遠征を呼びかけると、多国籍の軍隊が編成されることになる。聖地奪還を目指し、東方に遠征したこの組織は、中世の騎士が胸に十字架の印を付けて戦ったため、十字軍と呼ばれている（右の画像参照¹²⁶³）。なお、この遠征軍だけではなく、他の時代に諸地域で結成されたキリスト教徒軍も十字軍とみなされることが多い（14世紀末の十字軍について、423、512頁参照）。



1095年、教皇は「十字軍に参加すると、罪は赦される」と語ったため、女性や子供を含め、約10万の庶民がコンスタンティノープルに集まってきた。この遠征軍は「民衆十字軍」と呼ばれ、騎士が参加した十字軍とは区別されているが、何れも東ローマ帝国を救う軍隊になるはずであった。しかし、その領土内に入った者は略奪を働き、帝国を脅かす存在になる。14世紀初頭には東ローマが十字軍、つまり、カトリック教徒に滅ぼされる事態が発生した。その後、帝国は復活したが、15世紀中頃、異教徒によって最終的に滅ぼされた（422頁参照）。

十字軍は聖地奪還という目的を最終的に達成することができなかったが、東方交易を活性化させ、イタリア半島で商業が発展した。そこにイスラム教徒が彼らの言語に翻訳して残っていた古代ギリシアの資料が持ち込まれると、ルネサンスが開花する。十字軍遠征が終わった頃、つまり、14世紀、ギリシア文化の再現が始まり、ヨーロッパのアイデンティティが強まるが、キリスト教徒軍の東方遠征は今日まで残る宗教対立の種を蒔くことにもなった。

なお、十字軍は幾つかのイスラム国家と対戦している。小アジアではルーム＝セルジューク朝が、聖地エルサレムを含む中東ではセルジューク朝やファーティマ朝が敵になるが、これらの王朝を倒すには至っていない。むしろ、ルーム＝セルジューク朝は遠征が行われた12世紀後半から13世紀初旬にかけて最盛期を迎えた。しかし、13世紀中頃、モンゴルに攻め入れられ、衰弱する。ルーム＝セルジューク朝はモンゴルを宗主国として仰いでいたが、次世紀の初旬、最終的に滅ぼされた。なお、その頃、つまり、ルーム＝セルジューク朝の衰退に乗じ、領土内の北西部にはオスマン君侯国が建てられ、後にオスマン帝国に発展する（422頁参照）。

¹²⁶² Susan M. Adams, Elena Bosch and others, The Genetic Legacy of Religious Diversity and Intolerance, Paternal Lineages of Christians, Jews, and Muslims in the Iberian Peninsula, The American Journal of Human Genetics 83, 2008, pp. 725–736.

¹²⁶³ 画像出典 History Maps, Erster Krezzug, in <https://history-maps.com/de/story/First-Crusade>

十字軍の遠征は11世紀末から13世紀にかけて、7回または8回、行われているが、その詳細は次の通りである。

1) 第1次遠征 (1096～1099年)

イエスの受難、埋葬、復活が起きた西暦30年頃、エルサレムはローマ帝国に支配されていた。395年に帝国が東西に分割されると、東ローマ帝国の領土になるが、637年、イスラム勢力に奪われた(413頁以下参照)。なお、彼らは異教にも寛容であり、キリスト教の信仰を認めていた。それが脅かされるようになるのは、1073年、スンナ派のイスラム教に改宗したトルコ人(セルジューク朝)がシーア派のアラブ人(ファーティマ朝)から聖地エルサレムを奪ってからである(両派の違いについて、414頁参照)。ただし、新しい支配者もキリスト教の信仰を一括りに禁止したわけではない。東ローマ皇帝は聖地奪還を訴えたが、真に意図していたのは、自国をイスラムの脅威から解放することであった。

当時、異教徒の脅威は現実的になっていた。1071年、トルコ人は東ローマ帝国領の小アジアに攻め入り、帝国軍を倒すと¹²⁶⁴、皇帝ロマンos 4世を捕虜にした。4世は同年中に釈放されたが、その時にはすでに新しい皇帝が立てられていたため、追放されることになる¹²⁶⁵。

1077年、トルコ人は占領した小アジアに別の王朝(ルーム=セルジューク朝)を建て、勢力を拡大した。これに脅威を感じた東ローマ皇帝のアレクシオス1世は、1090年、聖地奪還を名目とし、それまで対立していたローマ教皇に支援を要請するに至った(両者の対立について、232頁参照)。1095年、教皇のウルバヌス2世がこれに応じ、遠征を呼びかけると、数万の庶民が東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルに集まってきたが、彼らは移動中に略奪を働いており、また、戦闘能力を持っていなかったため、皇帝の信認を得られなかった。「民衆十字軍」と呼ばれた彼らは単独で小アジアに渡ったが、イスラム勢力の反撃にあい、ニケーア(ニカイア)に到着する前に玉砕する。

これとは別に、フランス南部、イタリア南部(後の両シチリア王国、223頁参照)、ネーデルラントの諸侯も連合軍を結成しており、一般に、十字軍とはこの軍隊を指す。1096年、彼らはコンスタンティノープルで東ローマ帝国軍と合流し、ボスポラス海峡を渡って小アジアに入ると、ルーム=セルジューク朝の首都ニケーアの攻略に成功した。また、1098年、南下して、アンティオキアを制すと、アンティオキア公国を建設する。1099年には聖地エルサレムを奪還し、エルサレム王国を建てた。なお、この国はカトリックの国であり、ギリシア正教の総主教は追放された。また、十字軍は聖地に住んでいたイスラム教徒やユダヤ人に対し虐殺や略奪を働いており、その残虐さは歴史に刻まれることになる。

ルーム=セルジューク朝の弱体化に成功した東ローマは、その脅威から解放され、皇帝の目的は達成された。

2) 第2次遠征 (1147～1149年)

十字軍は前述したエルサレム王国やアンティオキア公国の他にも、エデッサ伯国やトリポリ伯国といったカトリック教国を建てており、それらは**十字軍国家**と呼ばれた。

右図：近東(中東)の情勢(1135年)¹²⁶⁶



¹²⁶⁴ なお、同じ頃、東ローマ帝国(ビザンツ帝国)は南イタリアをノルマン人に奪われた(223頁参照)。

¹²⁶⁵ 1071年、マンジケルトの戦い(マラズギルドの戦い)でロマンos 4世が大敗を喫し、セルジューク朝に拘束されると、皇后が前夫(東ローマ皇帝のコンスタティノス10世)との間に生んだミカエル7世が新皇帝になるが、帝国は内憂外患で混乱しており、1078年、ニケフォロス3世が帝位を奪った。彼も1081年、反乱により退位を余儀なくされ、アレクシオス1世が即位する。

¹²⁶⁶ 画像出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Map_Crusader_states_1135-jp.png

1144年、エデッサ伯国がトルコ系のイスラム王朝（ザンギー朝）に滅ぼされると、その再建を目的とし、遠征が再開されることになる。なお、キリスト教軍にはドイツ王のコンラート3世、フランス王のルイ7世、両シチリア王のルッジェーロ2世が自ら参加し、戦地に赴いた。フランスの部隊には王妃も帯同し、聖地への巡礼を兼ねた大規模な遠征になった。

キリスト教軍はドイツ王とフランス王の見解の違いだけではなく、東ローマ帝国との不和を理由とし、まとまりにかけた。そのため、エデッサ伯国の回復という目的を達成することはできなかった。

3) 第3次遠征 (1189~1192年)

1169年、アイユーブ朝を興したサラディンが聖戦を開始し、1187年にエルサレムを奪い返すと、教皇グレゴリウス8世の提唱に基づき、史上最大規模の十字軍が編成され、神聖ローマ皇帝のフリードリヒ1世（バルバロッサ赤髭王）、フランス王のフィリップ2世、イングランド王のリチャード1世（獅子心王）、オーストリア公のレオポルト5世等が参加した。諸国の君主が参加したことから、このカトリック教徒軍は「諸王の十字軍」とも呼ばれる。

なお、神聖ローマ皇帝のフリードリヒ1世は帝国を復興させた偉大な君主であり、「バルバロッサ赤髭王」という愛称で知られている。1190年、小アジアを移動中に川で溺れ、亡くなると、アンティオキアで埋葬された。イングランドのリチャード1世も数々の伝説を残した王の一人であるが（501頁参照）、共に遠征に参加したフランスのフィリップ2世と対立するようになり、彼と対戦する過程で敗死した（460頁参照）。アイユーブ朝を創設した敵将のサラディンもイスラム圏の英雄として名を馳せた人物である。

十字軍はアッコ（Acre 現イスラエル北部の都市）を始めとする主要都市の攻略に成功しているが、聖地奪回は果たせなかった。味方が相次いで撤退する中、イングランド国王のリチャード1世は、その後も1年以上、戦闘を続けたが、兵力は衰えていったため、1192年9月、サラディンにキリスト教徒のエルサレム巡礼を認めさせ、退却した。なお、同年12月、帰路についたリチャード1世がオーストリア領内で拘束され、1年以上に亘り幽閉されるという中世君主間の確執を象徴する事件が発生している。

1191年7月、十字軍がアッコを攻略し、オーストリア公のレオポルト5世が勝利の旗を掲げると、リチャード1世（獅子心王）の家臣はレオポルトの手柄を否定し、旗を倒したとされている。これに激怒したレオポルトは十字軍から離脱し、帰国してしまった。また、その怨恨から、翌年、帰路の途中で自国領内に入ったリチャードを拘束し、神聖ローマ皇帝¹²⁶⁷に引き渡した。獅子心王は1年以上、拘束されることになり、高額の身代金を払い、釈放されたのは1194年2月である。

当時、リチャード1世は英雄視されており、キリスト教徒の聖地巡礼をセルジューク朝に認めさせる功績も挙げていたため、彼を捕らえたレオポルトは、教皇（ケレスティヌス3世）より破門された。リチャードが解放された年の暮れ（1194年12月）、レオポルトは落馬し、命を落としている。なお、彼はオーストリア公であったが、ハプスブルク家ではなく、バーベンベルク家の出身である（451頁参照）。オーストリアの国旗が「赤・白・赤」の配色になっているのは、十字軍遠征中、レオポルトは返り血を浴びたが、ベルトの部分は血で染まらなかったことに由来するという伝承がある。

片膝をつき、神聖ローマ皇帝（ハインリヒ6世）から「赤・白・赤」の軍旗を授かるレオポルト5世（左）



¹²⁶⁷ 当時、神聖ローマ皇帝を務めていたのは、遠征中に溺死したバルバロッサ赤髭王の次男のハインリヒ6世である。両者はシュタウフェン家（ホーエンシュタウフェン家）に属していた。なお、ハプスブルク家より代々の皇帝が輩出されるようになるのは15世紀以降のことである（31頁参照）。

◎ フランスとイングランドの抗争

第3次遠征が始まった頃、イングランドを治めていたのはフランス貴族の**アンジュー伯**であり、彼はフランスでは国王の封臣であった(501頁参照)。国王の家臣がイングランドの王となるこの特殊な状況は、後者がフランスにも広大な領土を持っており(ノルマンディーについて223頁参照)、それはフランス国王の領地よりも広いことによって強まっていた。なお、イングランド国王で、アンジュー伯のヘンリー2世が息子のリチャード1世(獅子心王)と不和になり、戦闘が始まると、フランス国王のフィリップ2世はリチャードの側について参戦し、領土回復を目指した。

1187年、教皇が第3次十字軍の遠征を呼びかけると、英仏の両王は戦闘を停止し、遠征の準備に取りかかったが、イングランド王は出発直前に敗死したため、息子のリチャード1世が騎士軍を率いることになった。彼とフランス国王のフィリップ2世は聖地奪回を目指して戦ったが、遠征中に不和になり、一足早く帰国したフィリップ2世は、リチャード1世の所領を次々と獲得していった。リチャードが神聖ローマ皇帝による拘束から解放され、帰還すると、領土を奪い返されてしまうが、1199年、彼が戦場で倒れ、弟のジョンが跡を継ぐと、フィリップ2世は攻勢を強め、領地を回復した(460頁参照)。



1191年7月、イスラム勢力の要所アッコ(Acre) を攻略し、この地の鍵を受け取るフランス国王のフィリップ2世(中央)とイングランド国王のリチャード1世

なお、アッコの包囲戦では、フランドル伯(183頁参照)のフィリップが亡くなっている。後継者争いを収めるため、フィリップ2世が帰国を決めると、リチャード1世は反発するが、仏国王は病気を理由に、いち早く帰国し、リチャードの領地を奪った。両王の関係は、1191年3月、リチャード1世がフィリップ2世の姉との婚約¹²⁶⁸を破棄したことでさらに悪化しており、十字軍遠征でも別行動をとるようになっていた。

4) 第4次遠征(1202~1204年)

13世紀、十字軍遠征は本来の目的である聖地奪還から逸脱し、地中海における政治・経済上の利益追求に転化した。その結果、東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルを占領し、**ラテン帝国**を創設するに至る。それを主導したのは**ヴェネツィア**の商人であった。北イタリアのこの都市国家(**海洋共和国**、208頁参照)は10世紀より東方貿易で繁栄し、11世紀末に一連の十字軍遠征が始まると、その出発港として、さらに発展し、第4次遠征が行われた13世紀初頭には人口100万人の都市国家になっていた。

十字軍に攻め入られた東ローマでは短期間の内に皇帝が次々と変わる事態に陥る。最終的に小アジアへ亡命を余儀なくされ、東ローマは一時的に消滅した。跡を継いだ皇帝が帝都コンスタンティノープルを奪回し、東ローマを復活させた

¹²⁶⁸ この婚約は、両人がまだ幼い頃、政略的に成立している。

のは約 50 年後である (327 頁参照)。

第 4 次遠征を呼びかけたインノケンティウス 3 世 (153 頁参照) は教皇権の絶頂期を築いた人物として知られており、フランス国王フィリップ 2 世の再婚を認めず、破門を言い渡して屈服させた。また、中東への遠征を提唱すると、イベリア半島でも、キリスト教徒軍が結成され、半島をイスラム勢力から奪回する運動 (レコンキスタ) が活性化した (484 頁参照)。

5) 第 5 次遠征 (1228~1229 年)、第 6 次遠征 (1248~1254 年)、第 7 次遠征 (1270 年)

13 世紀にも、度々、十字軍が編成されたが、遠征は何れも目的を達成することができなかった。1270 年の第 7 次遠征をもって十字軍の時代は幕を下ろす。

もっとも、小規模な遠征は、その後も行われた。例えば、1343 年、アヴィニヨン教皇 (336 頁参照) のクレメンス 6 世が小アジアのスルミナ (現トルコ・イズミル¹²⁶⁹) の奪回を目指し、十字軍遠征を呼びかけると、ヴェネツィア、キプロス、ヨハネス騎士団によってスルミナ十字軍が結成され、1343~1344 年と 1345~1351 年の 2 回、遠征が実施された。キリスト教徒はスルミナの奪還に成功し、1402 年にモンゴル勢力 (ティムール朝) に攻略されるまで支配した。

また、1453 年、オスマン帝国によるコンスタンティノープル攻略 (453 頁参照) は十字軍の精神を復活させ、教皇はキリスト教徒軍の遠征を呼びかけたが、「聖なる父」の権威はすでに失われており、実現しなかった。

5. モンゴル帝国の台頭と東アジアとの交流

13 世紀初旬、チンギス・ハンは東アジアの北に位置するモンゴル高原に遊牧国家を建設した。1271 年、この王国は中国全土を支配下に収め、新しい王朝 (元) を開くまでになるが、それに先立つ 1240 年、キエフ公国を滅ぼし、現ロシア、ウクライナ地方を支配するようになっていた (516 頁参照)。帝国はさらに西へと進み、翌年、現ポーランド西部のシロンスク (シュレジエン) でポーランド・ドイツ連合軍を撃破した (ワールシュタットの戦い)。しかし、すぐに撤退したため、ロシア、ウクライナ地方を除くと、彼らの勢力がヨーロッパに及ぶことはなかった。

モンゴルの来襲はキリスト教徒を震撼させる一方、イスラム圏の向こう側に広がる地域への関心を高めるきっかけにもなった。当初、ローマ教皇のインノケンティウス 4 世はモンゴルを敵対視していたが、後に、彼らはイスラム教徒ではなく、この異教徒と戦う上で協力することができると考えるようになり、和平を模索した。彼やフランス国王のルイ 9 世が使節を派遣すると東西交流が始まる。

同じ頃、イタリア・ヴェネツィア出身のマルコ・ポーロは独自に元に渡ると、約 17 年間、滞在し、中国や日本の様子を (初めて) ヨーロッパに伝えた (本書冒頭の i 頁を参照されたい)。

15 世紀後半になると、ポルトガルが、それまでの陸路ではなく、アフリカを回る海路で、東アジアに進出するようになる (496 頁参照)。

なお、すでに 11 世紀末頃より西欧のキリスト教徒は十字軍を編成し、小アジアや中東に遠征していた (417 頁以下参照)。さらにその東方にはキリスト教国が建てられており、指導者のプレスター=ジョンが十字軍の支援に駆けつけるという伝説が広まっていた。13 世紀、突如、ヨーロッパに出現したモンゴル軍は彼が率いる援軍として誤解されることもあったとされている¹²⁷⁰。



マルコ・ポーロ (1254~1324 年)
Giovanni Grevembroch 画 (18 世紀)

ポーロは元王朝を開いたフビライに気に入られ、高官に任命されると、中国各地を回った。彼の旅行記である『東方見聞録』は、1298 年頃、ルスティケロ・ダ・ピサによって作成されている (本書冒頭の注 1 参照)。

¹²⁶⁹ なお、イズミルはイズニク (旧ニケーア) とは異なり、後者の北西 (エーゲ海東岸) に位置する。1343 年当時、イズミルはトルコ系のアイドゥン侯国 (オスマン帝国ではない) に支配されていた。

¹²⁷⁰ Neperos, In search of the kingdom of Prester John, in <https://www.neperos.com/article/s8ydb945643216a6>

6. オスマン帝国との対立 (14 世紀～20 世紀初旬)

前述した十字軍の遠征は西欧のキリスト教徒による東方遠征であったが、それが終わると、東ヨーロッパは逆にイスラム教徒に攻め入られることになる。14 世紀中頃、その後、500 年も続く**オスマン帝国**との対立が始まった。

オスマン帝国は、13 世紀半ば、ルーム＝セルジューク朝がモンゴル帝国の侵入を受けて衰退する中、**オスマン 1 世** (オスマン＝ベイ) が小アジア北西部¹²⁷¹に興した君侯国を起源とする。1299 年の建国時はニケーア (現トルコ・イズニク) の南に位置するイェニシェヒルを首都にしていたが、1326 年頃、オスマン 1 世の跡を継いだオルハンが東ローマ帝国からブルサを奪い、新しい首都とした。彼は皇帝の娘を娶^{めと}り¹²⁷²、バルカン半島南部への進出を果たしている。なお、オスマンが「帝国」となるのは、まさにヨーロッパにも領土を持ち、異民族を従えるようになったためである。

◎ トルコの脅威 (Türkengefahr)

14 世紀から 17 世紀にかけて、オスマン帝国はバルカン諸国やハンガリーを占領し、ヨーロッパ人を震撼させた。この現象は「**トルコの脅威**」(Türkengefahr)と呼ばれているが、この概念が用いられるようになったのは 19 世紀末である¹²⁷³。その頃に脅威はもう収まっていた。

なお、「トルコ」とはオスマン帝国のみを指しているわけではなく、この帝国は「トルコ」でもない。すでに 11 世紀後半、トルコ系の民族は東ローマ帝国から小アジアを奪い、王国 (ルーム＝セルジューク朝) を建てており (418 頁参照)、これは東ローマを脅かし、十字軍遠征の要因となる。遠征が終わった 14 世紀、ルーム＝セルジューク朝の衰弱に乗じ、別のトルコ系民族がその領土内にアイドゥン侯国を興した。彼らはエーゲ海で海賊行為を働き、ヨーロッパ人に危害を与えるようになったため、14 世紀中頃、教皇のクレメンス 6 世は十字軍遠征を呼びかけている (421 頁参照)。

「トルコの脅威」が本格化したのは、1389 年、オスマン帝国がコソボの戦いでセルビア、ルーマニア、ブルガリア等のキリスト教徒軍を倒したときである。1453 年には東ローマ帝国も滅ぼされた。なお、オスマン皇帝はトルコ人であり、宮廷ではトルコ語が使用されていたが、近年の研究で、住民はトルコ人だけではなかったことが分かっている。そのため、現在、オスマン帝国はトルコ国家として捉えられていないが、「トルコの脅威」という概念は、すでに 19 世紀末に考案されており、後世の研究成果はそれに反映されていない。

オスマン帝国は、17 世紀後半、2 度目のウィーン攻略に挑んだが、成功せず、その後に始まった大トルコ戦争でキリスト教徒軍に敗れると、1699 年、初めて領土を失うことになった。これを機に「トルコの脅威」も弱まっていく。

1) バルカン諸国の攻略

第 3 代皇帝のムラト 1 世がドナウ川流域にまで進出すると、セルビア、ルーマニア、ブルガリア等のキリスト教国は団結して対抗したが、1389 年、**コソボの戦い**で敗れ、これらの地域はオスマン体制に組み込まれる。1396 年、ハンガ

¹²⁷¹ オスマン君侯国は東ローマ帝国とルーム＝セルジューク朝の国境付近に建てられた。

¹²⁷² 東ローマ帝国内で権力争いをしてきたヨハネス 6 世カンタクゼノスは、オスマン帝国を味方に付けるため、娘を第 2 代皇帝オルハンに嫁がせた。また、自らを援護させるため、オスマン軍をバルカン半島東部のトラキア (11 頁参照) に呼び寄せているが、これはイスラム勢力がヨーロッパに侵攻するきっかけとなる。

¹²⁷³ Zsuzsa Barbarics-Hermanik, Türkengefahr (Spätmittelalter/Frühe Neuzeit), in [https://www.historisches-lexikon-bayerns.de/Lexikon/Türkengefahr_\(Spätmittelalter/Frühe_Neuzeit\)](https://www.historisches-lexikon-bayerns.de/Lexikon/Türkengefahr_(Spätmittelalter/Frühe_Neuzeit)). See also See also Felix Konrad, Von der ‚Türken-gefahr‘ zu Exotismus und Orientalismus: Der Islam als Antithese Europas (1453–1914)?, in <https://d-nb.info/1031276076/34>

なお、我が国が日清戦争で勝利を挙げた 19 世紀末、ヨーロッパ諸国では「**黄禍論**」、つまり、日本を脅威とみなす見解が広まった。

リー王のジキスムント（後に神聖ローマ皇帝になる。337 頁参照）はヨーロッパ諸国と共に「十字軍」を結成し戦ったが、勝利を挙げることはできず、オスマン帝国はドナウ川中流域（現ブルガリア地方）まで勢力を拡大した。

2) 東ローマ帝国（ビザンツ帝国）の攻略

15 世紀初頭、オスマン帝国は東方からチャガタイ・ハン国（中央アジア・モンゴルに存在した遊牧国家）に攻め入れ、衰えた。しかし、この世紀の中頃、メフメト 2 世の下で国力を回復すると、1453 年、東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルを攻略し、東ローマを滅ぼすに至った。これはヨーロッパ諸国を震撼させるとともに、団結してイスラム勢力に対抗する地域統合の精神を育むことになる（576 頁参照）。

なお、オスマン帝国の領土拡大に聖戦の要素はなく、バルカン半島の住民がイスラム教への改宗を強制されることはなかった。彼らは従属民として扱われ、貢納の義務を負ったが（イスラム教徒の女性との結婚も禁止された）、一定の自治が認められ、コミュニティを作って生活することができた（ミットレについて、413 頁参照）。オスマン体制下でギリシアは政治的隷属を強いられ、文化も後退したというネガティブな見方は、19 世紀に台頭したオリエンタリズム・反東洋思想の中で生み出されたものである¹²⁷⁴。



1453 年、コンスタンティノープルを攻略したオスマン帝国

【参考】オスマン帝国の宗教政策

オスマン帝国はイスラム教スンナ派のオスマン 1 世によって建てられ、代々の皇帝はイスラム教徒であったが、異教の信仰を禁止しなかった（413 頁参照）。イスラム教への改宗が強制されることもなかったが、改宗すれば、官職に就くこともできたため、自主的に改宗するキリスト教徒もいた（その一方、ヨーロッパ各地でユダヤ教徒やイスラム教徒は迫害を受けた。この点について、416 頁を参照されたい）。

なお、1844 年、オスマン帝国は帝国の旗を指定している（右の画像）。これはトルコに引き継がれており、同国の旗とほとんど変わらないが、逆三日月と星（五芒星 ごぼうせい）はイスラム教の象徴とされ、他のイスラム教国の旗でも使用されることが少なくない。ただし、トルコは、1923 年、政教分離（スルタン制の廃止）を原則として発足した共和国である。



¹²⁷⁴ 周藤芳幸編『世界の歴史の旅 ギリシア』（山川出版社 2003 年）74 頁。



オスマン帝国の最盛期の領土 (1683年 ウィーン包囲があった年) 1275

1517年、オスマン帝国はエジプトや紅海沿岸部を支配していたマムルーク朝を滅ぼし、アラビア半島西岸に位置するイスラム教の2大聖地メッカ、メディナの保護権を獲得したが、半島内陸部にまで進出することはできなかった。19世紀中頃、帝国のアジア領は「近東」(Near East)と呼ばれるようになる(410頁参照)。

3) ウィーン包囲

1480年頃、オスマン帝国の勢力はバルカン半島の全域に及んだ。

1526年、帝国の絶頂期を築いたスレイマン1世はバルカン半島を北上し、ハンガリーを制圧した。また、同盟関係にあったフランスを支援するため、1529年、2ヶ月に亘ってウィーンを包囲し、オーストリアを脅かすことになる。これを第1次ウィーン包囲と呼ぶが、本格的な冬の到来を前に撤退した。

それから150年後、オスマン帝国は再びウィーンを包囲するが(1683年の第2次ウィーン包囲)、またも攻略に失敗したばかりか、教皇インノケンティウス11世の呼びかけに応じて結成された神聖同盟の反撃にあい、ハンガリーやバルカン半島における領土を失った(451頁参照)。第2次ウィーン包囲後に始まった両者間の戦いは大トルコ戦争と呼ばれており、1699年まで、16年に亘り続いた。カルロヴィッツの和約によってオスマン帝国はヨーロッパにおける所領を初めて失うことになる。これを境に、オスマンは弱体化していく一方で、帝国から領土を奪ったオーストリアは東欧における覇権を強め、「ドナウ帝国」に発展していく。



オーストリア南東部のシュタイアーマルク(34頁参照)で現地の女性を奴隷として連行するトルコ人(1530年)

1275 画像出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ottoman_Empire,_AD1683.png
 画像は著者により切り抜いてある。

4) 露土戦争 (ロシア・トルコ戦争)

1240年から1480年まで、ロシア（ないし、その前身であるキエフ公国）はモンゴル帝国に支配されていたが、独立すると黒海方面へ南下し、オスマン帝国と覇権を争った。16世紀後半から20世紀前半にかけて、両者間で勃発した12の戦争をまとめて**露土戦争**と呼ぶ。なお、露土戦争の「土」は「土耳其」（トルコ）の略字で、「オスマントルコ」を指す。かつて、「オスマン帝国」は「オスマントルコ」または「トルコ帝国」と呼ばれていた。これは皇帝がトルコ人で、宮廷ではトルコ語が使用されていたことによるが、多民族国家であったことが近年の研究で明らかになった。そのため、「オスマントルコ」や「トルコ帝国」という呼称は使われなくなったが、戦争は従来通り「露土戦争」と呼ばれている。国名を正しく表記するならば、「ロシア・オスマン戦争」となる。

19世紀、ロシアはクリミア半島周辺の覇権を争うだけでなく、スラブ人の独立と統一を主張し（ロシアもスラブ人が興した国である）、バルカン半島へ進出した。1877年に勃発した戦争（狭義の露土戦争）で敗れたオスマン帝国は、この半島上に持っていた領土をほとんど失い、イスタンブール周辺を領有するのみとなる。なお、露土戦争にはバルカン諸国も参戦しており、独立を目指し戦った。

◎ 東方問題と「ヨーロッパの病人」

一連の露土戦争の中でも、19世紀に勃発したクリミア戦争と狭義の露土戦争において、ロシアは**汎スラブ主義**（372頁参照）を掲げ、戦った。14世紀よりオスマン帝国に支配されていたバルカン半島でも民族主義が高まり、独立運動が活性化する。

他方、19世紀半ばの帝国は諸制度の近代化（タンジマート、恩恵改革）が進まない中、財政状況が悪化し、社会不安が増幅していた。この状況を捉え、オスマン帝国は「**ヨーロッパの病人**」（Sick man of Europe）と目されるようになる¹²⁷⁶。なお、我が国で使用されることがある「瀕死の病人」という表現はヨーロッパでは用いられていない。

ロシア皇帝がオスマン帝国の解体を狙い、攻め入ると、他の列強はロシアの覇権拡大を警戒する一方、オスマン領の獲得を狙い介入した。19世紀におけるこの外交事案を**東方問題**（Eastern question）と呼ぶ。露土戦争はその延長線上にあり、単に、ロシア・オスマン間の戦争ではなかった。

◎ マケドニア問題

古くからマケドニア地方には多くのブルガリア人が住んでおり、言語・文化面で、この隣国の影響を強く受けている。ギリシアやセルビアとも国境を接し、交通の要衝にあたることから、中世より3国は領有をめぐる争ってきた。14世紀後半、この地域はオスマン帝国領に組み込まれるが、20世紀初旬、その支配から脱すると、領有をめぐる対立が激化する。これを**マケドニア問題**（Macedonian question）と言い、バルカン半島が「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれた要因の一つとなる。

※ マケドニアの国号に関する争いについて、92頁参照
ブルガリアとの争いについて、94頁参照

前述したように、露土戦争とは、ロシア・オスマン帝国間で発生した一連の戦争の総称である。一般に、1768年に始まった戦いを**第1次露土戦争**とするが、主な戦争は次の通りである。

① 1768～1774年の戦争（第1次露土戦争）

黒海への進出を狙うロシア（エカチェリーナ2世）がこの海域を支配していたオスマン帝国に攻撃をしかけ、第1次露土戦争を勃発させた。勝利を挙げたロシアは黒海、ボスポラス海峡、ダーダネルス海峡（5頁参照）の航行権を得る。なお、クリミア半島（97頁参照）に建てられていたトルコ系のクリム＝ハン国は、その後もオスマン帝国を宗主国として仰いだため、1783年、ロシアは軍隊を派遣し、同国ないしクリミア半島の併合を強行した。

¹²⁷⁶ Jason Karaian and Nikhil Sonnad, All the people, places, and things called the “sick man of Europe” over the past 160 years, in <https://qz.com/588958/>. なお、「ヨーロッパの病人」という表現は1878年以降、セルビア、ブルガリア等が次々と独立する前から使用されていた。

② 1828～1829年の戦争（第4次露土戦争）

1821年、ギリシアがオスマン帝国からの独立を求め起こした戦争（**ギリシア独立戦争**、後述参照）の終盤、ロシアが介入すると、オスマン皇帝が反発し、戦争が勃発した。オスマン帝国は敗北し、ジョージアやアルメニアにおけるロシアの主権を認めた。

ギリシアとセルビアは自治権を獲得した。なお、英仏はギリシアに対するロシアの影響力拡大を牽制するため、1830年、ロンドン議定書を制定し、ギリシアの完全独立について定めた。1832年、新たにロンドン条約が締結され、ギリシア王国が発足する。

◎ ギリシア独立戦争

19世紀、古代ギリシアをヨーロッパの起源と捉え、尊重する**ギリシア愛護主義**（125頁参照）が欧州各地で広まった。この状況にも後押しされ、ギリシアはオスマン帝国からの独立を求め、兵を挙げた（1821～1828年の**ギリシア独立戦争**）。ウィーン体制を主導していたオーストリアや神聖同盟は現状変更に対抗したが、オスマン帝国と対立するロシアは独立を支持した。

1827年、ロシア・オスマン間で露土戦争が勃発し（426頁参照）、ロシアが勝利を収めると、翌年、ギリシアは自治権の獲得に成功する。また、ロシアの影響力拡大を恐れる英仏が介入した結果、1830年、ロンドン議定書が制定され、ギリシアは完全独立を達成した（セルビアは完全な自治権を獲得する）。さらに、1832年、新たにロンドン条約が締結され、列強は**ギリシア王国**を発足させた。初代国王には、東ローマ皇帝の血をひき、ギリシア独立戦争を支援していたバイエルン王国（ヴィッテルスバッハ家）の王子が迎えられ、1833年、オソン1世として即位した¹²⁷⁷。

③ 1853～1856年のクリミア戦争

16～18世紀、オスマン帝国は聖地エルサレムの管理権をフランス国王に与えていた（576頁参照）。これには聖墳墓教会（242頁参照）を使用する権利が含まれ、同教会はカトリックの礼拝に使用されていたが、フランス革命で国王が失脚し、内政が混乱すると、1808年、教会の使用権は正教会に移った。1852年、ナポレオン3世が皇帝として即位し、覇権強化に乗り出したフランスは、その返還を帝国に認めさせたが、これは正教会の盟主を自認するロシア皇帝（ニコライ1世）の反発を招いた。ロシアがエルサレムの共同管理をオスマン帝国に打診すると、イギリスはこれをロシアのパレスチナ進出と捉えて警戒し、フランスの側に立って介入するようになった。当事国は交渉を重ねたが、まとまらず、ロシアがバルカン半島北東部（オスマン帝国によって自治を認められていたモルダヴィア、ワラキア）に侵攻すると、イギリスはオスマン帝国に戦争を促した。

オスマン帝国の宣戦布告によって始まった戦争は、主たる戦場となった地域にちなみ「**クリミア戦争**」と呼ばれているが、戦闘はバルカン半島、バルト海、カムチャツカ半島でも行われた。開戦時、クリミア半島はすでにロシア領であり、ロシアはその獲得を狙っていたわけではないことや、ギリシア正教の利益擁護を口実にした同国のさらなる南下が戦争の原因であったため、「**オリエント戦争**」とも呼ばれている。1815年のウィーン会議以降、ヨーロッパの列強は大きな戦争を回避してきたが、この戦争により、約40年間、保たれてきたウィーン体制は崩壊した（585頁参照）。

クリミア戦争は露土戦争の一つであり、南下政策を進めるロシアとオスマン帝国の戦いであったが、実質的にはオスマン帝国を支援した英仏が当事国であり、両国はクリミア半島でロシア軍を撃退した。敗れたロシアは南下政策の中断を余儀なくされることになる¹²⁷⁸。他方、ナポレオン1世の甥であるナポレオン3世（1852年12月即位、463頁参照）は名声を高め、オスマン帝国は列強との関係を改善することができた。

¹²⁷⁷ Björn Opfer-Klinger, 1913 als Kriegsjahr, Südosteuropa und die Balkankriege, APuZ 2013, Vorkrieg 1913, pp. 15-21, 19.

¹²⁷⁸ 自領内のクリミア半島での敗戦はロシアの後進性を浮き彫りにし、戦後、アレクサンドル2世（在位期1855～1881年）は上からの改革を実施した。彼が農奴解放令を出すと、ウィーン決議に基づき支配していたポーランドでも民族主義運動が活性化し、1863年1月、反乱に発展する（**1月蜂起**、10頁参照）。ポーランド人は武装蜂起し、帝政ロシアに抵抗したが、翌年4月、鎮圧され、自治権を奪われることになった。

なお、イギリスの看護士ナイティンゲール（1820～1910年）は、この戦争中、イスタンブールの対岸にあるクリスタに派遣され、負傷兵の看護にあたった。戦後、彼女が戦死者の悲惨な状況を告発すると、1864年、それに共鳴したスイスのアンリ・デュナンによって国際赤十字が創設された。人道的活動に貢献した彼は、1901年、ノーベル平和賞の初の受賞者となる。

④ 1877～1878年の戦争（狭義の露土戦争）

一般に、**露土戦争**とはこの戦争を指し¹²⁷⁹、ボスニア・ヘルツェゴビナにおける暴動が引き金となって勃発した。1875年、オスマン帝国に支配されていた、この地域のキリスト教徒（主に農民）が重税に反発し、蜂起すると、ブルガリアに波及した（1876年の**四月蜂起**）。セルビアとモンテネグロもスラブ人の解放を求め兵を挙げたが、何れも敗退する。その直後、帝国によるブルガリア人の大虐殺が明るみになり、ヨーロッパで反オスマン感情が高まる中、汎スラブ主義を掲げるロシアが介入し、オスマン帝国に宣戦を布告すると、バルカン諸国もロシアの側について参戦した。

ロシアとバルカン諸国はオスマン軍を圧倒し、ルーマニア、セルビア、モンテネグロは独立を勝ち取った。ブルガリアは自治権を獲得するが、向こう2年間、ロシア軍が駐留することになる（サン＝ステファノ条約）。しかし、ロシアのバルカン半島進出を警戒したイギリスとオーストリアが反発したため、ドイツ帝国宰相のビスマルク（447頁参照）はベルリンで国際会議を開き、ブルガリアの3分割¹²⁸⁰や、ロシアの覇権排除を決めた（ベルリン条約）。なお、オーストリアはボスニア・ヘルツェゴビナの統治権（行政権）を¹²⁸¹、イギリスはオスマン帝国からキプロス島を租借する権利を得る。

◎ クレタ島のギリシアへの編入

エーゲ海の南淵に位置するクレタ島の支配者は時代によって変わった。オスマン帝国がヴェネツィアからこの島を奪ったのは1669年であり、バルカン半島の領有より200年以上、遅い。ヴェネツィアとは異なり、スルタン（オスマン皇帝）はギリシア正教徒に信仰の自由を保障したが、彼らは度々、反乱を起こしたため、この自由は制限されることになった。

1821年、ギリシア独立戦争が勃発すると、クレタ島も参戦し、オスマン軍を倒したが、島の独立は列強によって阻止された。なお、列強はギリシアの独立は認めている。

1866年以降、島民はギリシアとの統合を希求し、蜂起を繰り返したが、何れも成功しなかった。1897年、ギリシアがクレタ島の編入をもくろみ、島に軍隊を派遣すると、希土戦争が勃発する。列強は、オスマン帝国はもはや体制を維持できないと判断する一方、クレタ島のギリシアへの編入は帝国を解体させかねないため、軍艦を派遣し、ギリシア・オスマン間の戦闘を制御した。その後、諸国はクレタ島を引き続きオスマン領とする一方、島民に自治を認めたと¹²⁸²、これに納得しない人々はギリシアとの統合運動（エノシス運動）を継続した。

1908年、オスマン帝国で青年トルコ革命が起き、帝国が混乱すると、島民はその隙をつき、ギリシアへの編入を宣言した。列強はこれを直ちに承認しなかったが、1913年、第1次バルカン戦争の講和会議において編入を認めるに至った。これを受け、オスマン帝国は領有権を放棄した。

第1次世界大戦で敗北した帝国は1922年に解体され、トルコ共和国が発足する。翌年、ローザンヌ条約によってギリシア・トルコ間の国境が確定し、クレタ島はギリシア領であることが確認された（11頁の注48参照）。これに基づき、住民の交換が行われ、島に残っていたトルコ人は退去した。

¹²⁷⁹ 南塚信吾『『東方問題』と『アフリカ分割』』南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵『新しく学ぶ西洋の歴史 ― アジアから考える ―』（ミネルヴァ書房 2016年）185～186頁（185頁）。

¹²⁸⁰ ブルガリアは、①ブルガリア自治公国、②東ルメリ自治州、③マケドニアに分割され、①の公国はオスマン帝国を宗主国とする自治国となり、②の自治州と③のマケドニアはオスマン領に留まった。

¹²⁸¹ 開戦に際し、ロシアはオーストリアと秘密協定（ライヒシュタット協定）を結び、ボスニア・ヘルツェゴビナをオーストリア領とすることで合意していた。ベルリン条約はそれを実現したに過ぎない。

¹²⁸² Jost Dülffer: Inseln als Brennpunkte internationaler Politik, Konfliktbewältigung im Wandel des internationalen Systems 1890–1984, Verlag Wissenschaft und Politik 1986.

5) 青年トルコ

1889年頃、衰退が顕著になったオスマン帝国では、西洋式の近代教育を受けた若いエリート層が帝国の復活を目指し、反政府活動を行うようになった。「青年トルコ」ないし「青年トルコ人」(Young Turks)と呼ばれた彼らは、1908年、政権奪取に成功すると(青年トルコ革命)、西ヨーロッパ諸国から専門家を招聘し、国政改革や軍事力強化を図った¹²⁸³。しかし、1912年に勃発したバルカン戦争でブルガリア、セルビア、ギリシア等の連合軍に敗れ、バルカン半島における領土の大部分を失うことになる(380頁参照)。

なお、青年トルコ政権は欧州との距離を縮め、15世紀から続いていた対立を緩和した。

6) 第1次世界大戦と帝国の崩壊

1914年7月、第1次世界大戦が勃発すると、オスマン帝国は、11月、ドイツやオーストリア=ハンガリーの側につき参戦した。青年トルコ政権は汎スラブ主義を掲げるロシアとの戦争を「聖戦」と位置づけ、ドイツと同盟を結成して戦った。なお、大戦中、オスマン帝国が行ったアルメニア人の大量虐殺は現在でも厳しく批判されている。

大戦初期、オスマン軍は優勢であったが、同盟国のドイツに同じく、英米軍に追い込まれていく。敗戦が決定的になった1918年10月、オスマン皇帝のメフメト6世が連合軍に降伏すると、青年トルコ政府は崩壊した。

敗戦を機に帝国も実質的に消滅するが、1922年11月、青年トルコ運動の流れを汲むムスタファ・ケマル将軍(写真右)が帝政の廃止を宣言し、メフメト6世を廃位に追いやった。また、翌23年10月、トルコ共和国の樹立する(トルコ革命)。なお、初代大統領に就任したケマルは政教分離、つまり、政治の非イスラム化を柱とする近代化を推進した。それを称え、議会から「アタテュルク」(Atatürk「父なるトルコ人」の意)の称号を贈られている。



7. キプロス問題

前述したように、1878年、狭義の露土戦争後に開かれたベルリン会議で、イギリスはキプロス島の租借権をオスマン帝国から得ていたが、第1次世界大戦後でトルコが敗れて衰退すると、1923年、この島を奪取し、植民地とした。第2次世界大戦後の1960年、キプロス島は共和国として独立するが、1983年、トルコ系の島民は「北キプロス・トルコ共和国」を建設した。それ以降、島は南北に分断されている。国連は和平を模索したが、成功していない。近年、対立は海底資源をめぐり、むしろ深まっている(101頁参照)。

※ キプロス問題やギリシア・トルコ間の争いについて、99頁を参照されたい。

8. 第2次世界大戦後の移民問題

西ドイツは第2次世界大戦で壊滅的な敗北を喫したものの、1950年代後半、奇跡的な経済復興を果たした。労働力不足を補うため、トルコから多数の移民を積極的に受け入れることになり、多くのイスラム教徒が平和裏にやってくるようになった。それから半世紀以上が経過した現在、トルコ系2世・3世がドイツを母国として生活しているが、ドイツ社会に順応していない者も少なくない。また、移民家庭出身者は種々の差別を受けているとされる。このような状況の改善は現代ドイツの課題の一つになっており、種々の取り組みがなされる一方、トルコ政府の保守化、つまり、イスラム化や人権侵害は同国に対するイメージを悪化させ、トルコ系住民との関係改善に悪い影響を及ぼしている(詳しくは、171頁参照)。

なお、中東や北アフリカからの移民のほとんどはイスラム教徒であるが、信徒としてではなく、ヨーロッパの価値観を共有しない社会集団として捉えられることが多い。つまり、対立の要因はイスラム教ではなく、価値観や社会・文化の相違とされている(174頁参照)。

¹²⁸³ 1908年、青年トルコ政権が発足し、ボスニア・ヘルツェゴビナに自治権を与える計画が立てられると、オーストリアは、それまで開発してきたこの地域の独立(トルコ化)を恐れ、併合した。ブルガリア自治公国は独立を宣言し、翌1909年、オスマン帝国より承認された。オスマン帝国の自治領であったクレタ島もギリシアへの編入を一時的に宣言し、1913年(第1次バルカン戦争後)、帝国の承認を得た。

9. 近年のイスラム問題

2001年9月、米国同時多発テロ事件を起こしたイスラム過激派（アルカイダ）はヨーロッパでもテロ事件を発生させており、イスラム教徒との共存について活発に議論されるようになった。これは現代ヨーロッパの主要な社会問題の一つとして定着する中、2015年1月にはイスラム教をテーマにした風刺画にまつわる襲撃事件がフランス・パリで発生し、新たな衝撃を与えた（178頁参照）。

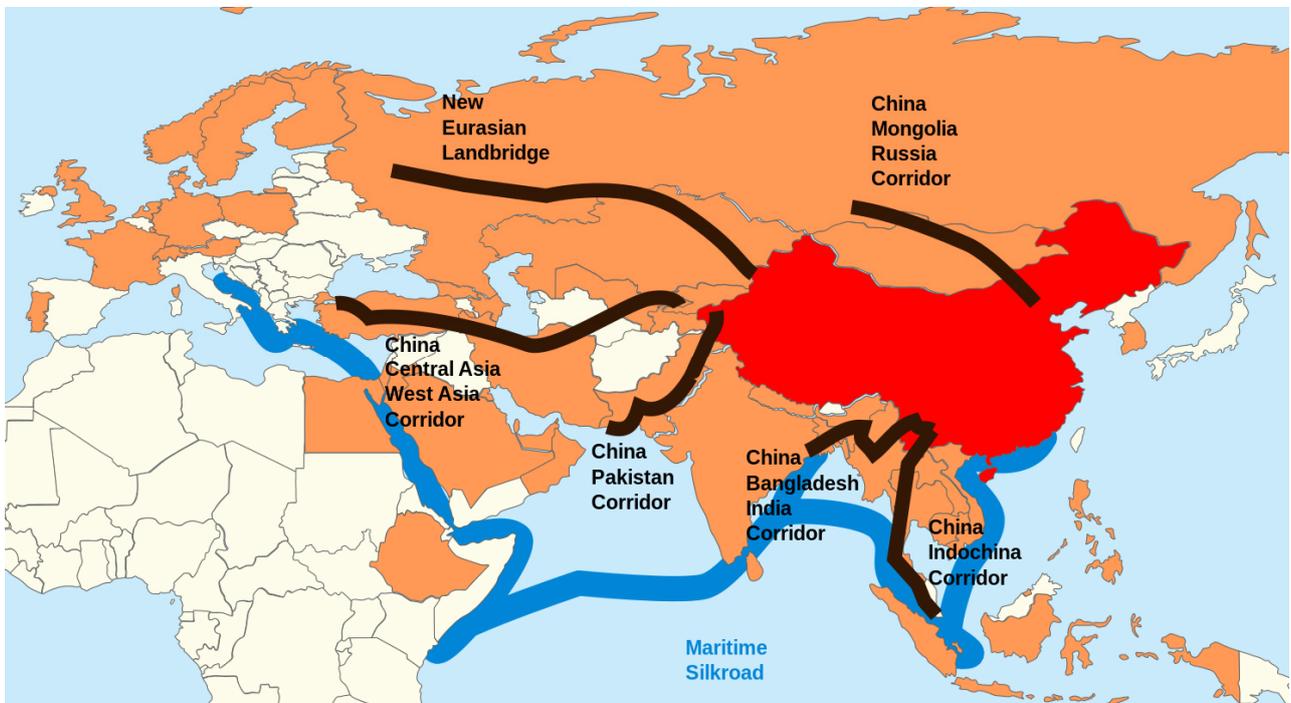
同月、いわゆるイスラム国（IS）が中東のシリアで戦闘を激化させると、8月以降、ヨーロッパには対応しきれないほど多くの難民が押し寄せ、EUは危機的状況に陥った（95、617頁参照）。なお、イスラム人口の急増という現象は、すでにその前から生じており、欧州のイスラム化が警戒されていた。イスラム問題はヨーロッパ諸国の政治やEU統合を揺るがす重大な論点の一つにあたる（詳しくは、174頁以下参照）。

【補説】中国の「一带一路」構想 ～ 現代のシルクロード

紀元前2世紀の終わり頃、中国の漢王朝は中央アジアを平定し、西アジアに通ずる交易路を開発した。この壮大な大陸横断路は中国の長安とシリアのアンティオキアを東西の起点とするが、西方ではローマまで延びていたという見方もある¹²⁸⁴。このルートを通じ、特に、中国産の絹（シルク）がヨーロッパにもたらされたことから、後世、この隊商路は「シルクロード」¹²⁸⁵と呼ばれるようになった。絹の他に、茶、陶磁器、香水等がヨーロッパへ、また、中国へはラクダや馬、ワイン、蜂蜜などがもたらされたが、1453年、オスマン帝国が東ローマ帝国を滅ぼすと、この陸路は急速に衰退し、ヨーロッパ諸国は**大航海時代**に入る（342頁参照）。

2013年、中国は、中央アジアを経由し、自国とヨーロッパを結ぶ「シルクロード経済ベルト」構想を提唱した。これは「一帯」と呼ばれ、インド洋経由の海路「21世紀海上シルクロード」の「一路」と併せ、「一带一路」構想と言う。巨大な経済圏の創設を目指し、鉄道や港湾の整備が行われ、ユーラシア大陸を横断する鉄道は「鉄のラクダ」と呼ばれている。

ヨーロッパ全体の人口は7億5000万であるのに対し、中国は2倍弱の規模を誇る。巨大市場への輸出拡大を狙い、イタリアは「一路」に参加していたが、輸出が伸びなかったことや、タブレット端末やインターネット回線をめぐり中国との関係が悪化したこと等を理由とし、2023年12月、脱退を表明した。



一帯（黒のライン）と一路（水色のライン）¹²⁸⁶

¹²⁸⁴ Hochschul- und Wissenschaftskommunikation der Universität Freiburg, Netz der Seidenstraßen, in <https://kommunikation.uni-freiburg.de/pm/online-magazin/forschen-und-entdecken/netz-der-seidenstrassen>.

¹²⁸⁵ 「シルクロード」は、19世紀後半、ドイツの地理学者リヒトホーフエン（Ferdinand Freiherr von Richthofen）が考案したドイツ語“Seidenstraßen”の和訳である。彼は「シルクロード」ではなく、「オアシスロード」と呼ばれている東トルキスタンを横切るルートにこの概念を用いていたが、20世紀に入り、転用されるようになった。

¹²⁸⁶ 画像出典 <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:One-belt-one-road.svg>（画像は著者により切り抜いてある）。



この資料は入稻福智著『地域研究ヨーロッパ～欧州の本質～』からの抜粋です。

全編（PDF A4 約 700 枚）は下の URL よりダウンロードすることができます。

ファイルのサイズは約 70MB と容量が大きいのので注してください。

<https://eu-info.jp/europe2025.pdf>

